変な約束

変な約束をした。とにかく変な約束をしたのだ。その約束は、今から半世紀ほど昔にさかのぼる。

昭和四十年の足利市。Y君と私は小学六年生だった。二人は仲が良く、いつもいっしょに遊んでいた。その日は、渡良瀬川の草むらに寝そべり、雲を眺めながら、いつもの、たわいもない話をしていた。

「ツネオよ、太陽は東から出て西へ沈むべ。これは地球が左回りだからだよな」

「ああ、そうだよな」

「右に回りだすことはねーのかなー」

「あっかもしんねーぞ」

「ところでツネオ、墓場鬼太郎、読んだか？」

当時の週刊雑誌に、墓場鬼太郎（後にゲゲゲの鬼太郎と改名され人気がでる）という漫画が、不定期で掲載された。幽霊とか霊魂、妖怪が登場する。変わった作風と独特の世界に二人は魅せられていた。

「読んだ、読んだ、おもしれーな。幽霊とか霊魂て、ほんとにあんのかなー」

「あるんじゃねーかな」

「俺もあるような気がすんだよな。どうやったら見られんのかなー」

その時に、変な約束ができたのだ。

「ツネオか俺の、どっちかが死んだら、会いに行くことにしねーか？」

「幽霊になってか？」

「そうだよ」

「よーし、わかった。約束だな」

二人は変な約束をした。

中学二年の時、私は宇都宮に転校して、Y君とは遊べなくなった。（俺はY君の家を知っているから、幽霊になっても行けるけど、Y君は俺の家を知らないから、来られないな）そんな心配をしながら、大人になった。

足利第二中学校の同窓会で、二十八年ぶりにY君に再会した。中学は二年の時、転校したので卒業生ではない。妙な話もあるもので、知合いの同窓会幹事が、私を入会させたというのだ。そんなわけで初めて同窓会に出席した。席は三年一組に用意されている。

「あなた誰だったっけ？一組にいたっけ？」

「いなかったよ。途中で転校したんで卒業してないんだよ・・・・」

ここに至った話をした。Y君は卒業時一組だったので、二人をよく知っている幹事が、そうしてくれたようだった。

開会時刻の少し前にY君は来た。

「おおっ！ツネオだろう！」

「そうだよ、久しぶり！」

二人は手を握り合っていた。

来賓の祝辞と乾杯が済むと、二人は円卓に隣りあって座った。
「懐かしいなー。ツネオとは昔、いろんな話をしたよなー」
「ああ、いろいろ話したよなー」
「地球はやっぱり左回りだろう」
「右にも回ったよ。地球儀を左に回して北極から見たら、当然左に回ってるけど、そのまま持ち上げて南極から見上げたら、右に回ってんだよ、変だよな。ところでＹ君、死んだら会いに行く約束は、まだ、だめだなー」
「そうだった。二人とも生きてるから、まだだよな」
「お互いに今住んでる家を知らないから、行けるかなーって、心配してたんだよ」
「大丈夫。霊は何でもわかるんだと思うよ」
「そうかい。実は最近、別な心配もでてきたんだよ」
「どんな心配なんだい？」
「アルツハイマーの幽霊になっても、大丈夫かなーって」
二人は笑いあった。
変な約束は、今も続いているのだ。

（原稿用紙四枚限定）